

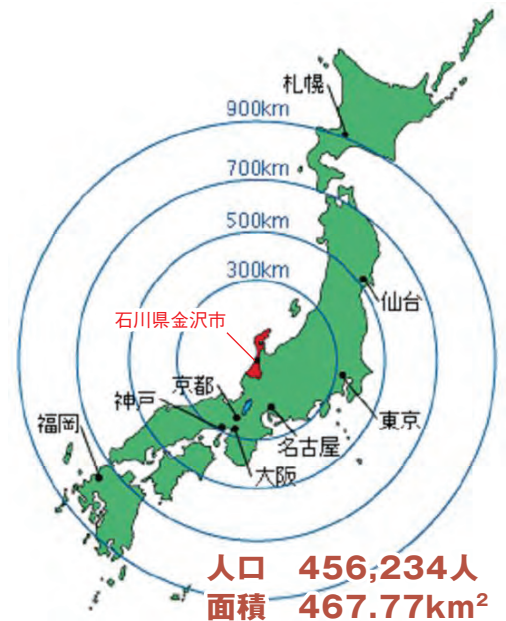


I. 金沢の 歴史と特徴

地 理

金沢市は日本列島の中心をなす本州のほぼ中央部の日本海側に位置する、人口45万人の中規模都市である。

古来、この地はアジア大陸に展開する中国、朝鮮、シベリアとの間で人・もの・情報の交流が盛んであり、自然環境にも恵まれ、豊かで個性的な文化を育んできた。さらに、中世から近代にかけては、日本の首都がおかれた京都や江戸（東京）との間で学術文化・経済などの交流を積極的に展開して、日本海沿岸地域における最大の都市として繁栄してきた。



金沢の位置

金沢は四季の変化が明確な土地柄で、その気候は日本海岸気候区に属し、年間降水量は全国有数を誇る。日本海沖を流れる対馬海流により同緯度の周辺地域と比較して冬季の寒さが和らぐ一方で、その水蒸気が北西季節風によって運ばれ降雪がもたらされる。冬季は特に曇天の日が続き日照時間が少なく、湿潤で重い積雪がある。

市域は、西を日本海に面し、東に白山山系の山並みが続いている。この地形を背景として、金沢の旧市街地は、3つの丘陵（卯辰山・小立野・寺町）と2つの河川（浅野川・犀川）からなる変化に富んだ構造を有している。

浅野川と犀川によって形成された河岸段丘に広がる市街地には、地形の高低差がつくる坂道や眺望のよい高台など、このまちの様々な表情がうかがえる場所が各所に存在している。また、市街地を南西から北東方向に連なる台地には豊かな緑が残り、河川からの用水が市域に張り巡らされており、都市内に水と緑の回廊を形成している。



金沢の地形

歴史

「金沢」という名の起こりは、地元から産出した砂金を洗った沢を金洗沢と呼んだことに由来しているという説が有力であるが、都市としての淵源は約500年前、一向宗の宗徒（門徒）によって日本の中世には例外的な農民による自治政府が出現したことに遡る。その後の約100年間にわたって「百姓のもちたる国」が繁栄し、その拠点となったのが16世紀中頃に建立された金沢御堂とその寺内町、現在の金沢城一帯である。

金沢御堂は本願寺・一向宗徒の加賀における拠点であったが、一向一揆鎮圧のあと金沢御堂跡に金沢城が構築され、かつての寺内町を取り込み城下町が建設された。城主となった前田家は、加賀・越中・能登三カ国約120万石を領有した江戸時代最大の大名であり、金沢はその政治・経済・文化などの中心都市として約300年間繁栄した点で、日本の城下町の代表であるとともに、それを取り巻く有力家臣団を中心とした小城下町群から構成された複合的構造を持つ城下町でもあった。城郭を中心に旧街路や町割り、庭園群、用水網、広見などが整備され、欧州の都市のような城壁こそないが、周辺に防御を兼ねた寺院群を配した独特の都市景観は、現在も保持されている。

江戸時代、加賀前田藩は武力で幕府に対抗する道を捨て、文治主義を選択し、学術と工芸と芸能を奨励、普及した。全国から著名な学者を招き、著作活動を支援し、江戸時代中期の高名な儒学者である新井白石をして「加賀は天下の書府である」と言わしめた。17世紀に開かれた御細工所は、元来、武具の修理を任務としていたが、転じて城中のさまざまな調度、什器に携わる職人工房となり、京都や江戸から名工を指導者として招いて金工・蒔絵などの工芸職人を養成した。また、藩主は自ら能や茶の湯を嗜み、それが家臣や町民にも広く普及したのである。御細工所の職人は、一日おきに能の稽古に通ったとも言われている。こうして、17世紀後半には、加賀藩に「百万石文化」と称される武家文化が確立されていった。

明治維新後の廃藩置県によって藩主・前田氏が東京に去り、武士階級が零落すると、維新当時、東京、大阪、京都に次いで多かった人口が、13万人から8万人へと急減していき金沢は時代に取り残されるかと思われた。

しかし、1890年代に入ると新興実業家を中心として独自の産業革命を成し遂げ、金沢は新しい歩みを踏み出したのである。城下町から金沢を変身させたのは、輸出羽二重の生産を中心とする繊維産業と、それを支えた繊維機械工業の発展であった。

この発展の基礎となったのが江戸時代に藩が勧めた工芸であった。御細工所に全国から招かれた名工たちは、象嵌、鋳物、指物等の指導を行い、町方にも腕利きの職人たちが揃っていった。そして江戸時代後期には「からくり」などの当時としては先端的な工芸が発達していた。これらの名工たちは明治維新によって加賀藩というパトロンを失うと零落したことは事実であるが、繊維産業の興隆と結びついた自動織機の開発と生産などで新しい道を開く地域イノベーターが登場した。

代表的なケースは、津田米次郎である。彼の父親、津田吉之助は大工の棟梁であり、明治初期の金沢を代表する名建築の一つ、前田利家を奉る尾山神社の神門（重要文化財）の造営工匠長を務めた。これは、中国風の門構えの上に、ステンドグラスの入った窓を持つ鐘楼が乗り、遠く日本海を航行する船の灯台の役割も演じたという当時としては前衛的なデザインの建造物であった。彼は建築以外にも「からくり」の名工として有名で、1875年に群馬県の富岡製糸工場の機械を見学し、これを模造すると、新興起業家であり、後に二代目の金沢市長となる長谷川準也が興した金沢製糸会社の工場に備えつけた。

その息子、米次郎と従弟の駒次郎が独自の機構を開発して「津田式絹動力織機」を生産したのはそれから10年後のことであった。駒次郎が興した津田駒工業は現在、世界的に評価されるウォータージェットルームなど高速革新織機のメーカーとして活躍している。このように江戸時代の職人の技能やノウハウが、革新されて近代工業に生かされ発展していったのである。

歴史的に見た創造都市としての金沢の特徴は、

第1に、1583年、戦国武将前田利家が金沢城を中心とする城下町を形成して以来、425年間、戦禍に遭うことなく、平和を愛し、文化を育み、自律した経済を持続させてきた人間的規模の都市であるといえる。

第2に、江戸時代において、歴代藩主が美術工芸・学術文化を奨励して、「百万石文化」と称される武家文化を確立した。これらは明治以降の近代化の中でも形を変えて持続し、今日の金沢文化－思想、美術工芸、伝統文化（能、茶道）、食文化の底流となり、市民の高い生活の質を維持するものとなっている。

第3に、明治以降の近代化の過程において、工芸的ものづくりの知恵と伝統を活かした独自の産業革命を成功させて、繊維工業と繊維機械工業とを両輪とする持続的な産業発展により、経済と文化のバランスの取れた都市経済構造を実現することになった。

第4に、第2次世界大戦後の高度経済成長と、その後のグローバル化の影響の中で、繊維産業が高成長とその後の衰退に直面すると、これまで蓄積した文化資本や知識資本を活用して先端的な芸術と伝統工芸との融合の中で新たな創造的文化産業の育成に挑戦していることである。

文化的生産

このような内発的発展を経験した金沢の都市経済の特徴は、持続的に発展を遂げた中堅・中小企業が多数集積していることである。これらには職人気質に富み、イノベーションを得意とし、独自技術を持ち“すき間分野”でのトップシェア（ニッチトップ）を維持する企業が多く、相互に刺激し合いつつ発展を遂げる自律性の高い都市経済をもたらしている。

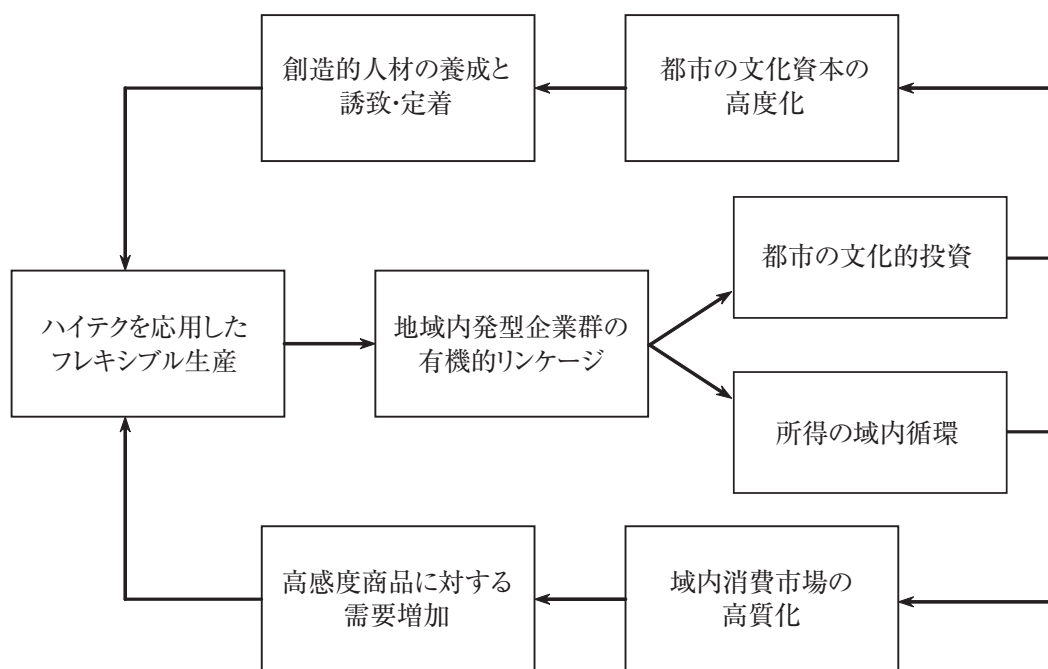
具体的には、先述のとおり、まず繊維工業と繊維機械工業とが地域内で相互連関的に発展を遂げたが、近年は工作機械や食品関連機械、出版・印刷工業、さらにコンピュータ関連産業までが展開された多彩な産業連関構造を保持するとともに、市民の「生活の質」を豊かに支える伝統産業や食品工業、アパレル産業等も発展をみている。

この内発的発展が外来型の大規模工業開発の抑制につながり、産業構造や都市構造の急激な転換が回避されてきたため、江戸時代以来の独特の伝統産業とともに歴史的なまちなみや周辺の自然環境などが守られ、金沢はアメニティ豊かな都市美を誇っている。そして、近代化以降も失われなかったこの独自の都市経済構造が、地域内で生み出された所得の域外への「漏出」を防ぎ、中堅企業の絶えざるイノベーションや文化的投資を可能にしたのである。

また、この都市経済構造が情報産業や各種のサービス業を発展させ、さらに大学（金沢大学、金沢美術工芸大学、金沢工業大学など13大学）や専門学校、多数の博物館や資料館等の学術文化の集積をもたらし、独自の質の高い都市文化が生み出された。つまり、経済余剰の都市内循環により、高質の文化資本や知識資本が保持されているのである。

このように質の高い文化的集積によって都市経済の発展を図る新しい産業発展の方式を「文化資本を生かした文化的生産」と呼ぶことができる。金沢がこれまでに実践し、また、めざしている「文化的生産」の要点をまとめると、

- ① 生産工程では職人的技能や感性とハイテク機器の結合によって文化的付加価値の高い財やサービスを生産し、
- ② 生活文化財産業からメカトロ産業、ソフトウェア・デザイン産業にまで至る地域内発型企業の緊密で有機的な産業連関構造を構築することによって、
- ③ 地域外から稼いだ所得が地域内で循環するとともに、これが新たな文化的投資と文化的消費に向かい、
- ④ 文化的投資は、美術館の建設、民間のデザイン研究所や、オーケストラ等の運営を支援し、都市の文化的集積を高度化することによって、文化的生産の担い手となるハイテク・ハイタッチの創造的人材を養成し、地域に定着させる一方、
- ⑤ 文化的消費は文化性・芸術性に富んだ財やサービスを楽しむ能力をもった生活者によって、地元の消費市場を高質化し、文化的生産への需要を喚起するような生産と消費のシステムということになる。



文化的生産システム

このようなシステムの源泉となっている金沢独自の文化は、歴代藩主による学術文化の庇護・奨励、長きに渡り保たれた平和のうちに、江戸時代から連綿と、市民生活にまで浸透し、受け継がれてきたものである。さらに、歴史的に培われた金沢

の精神風土は、伝統工芸や芸能を市民一人ひとりが嗜む土壌につながり、日本の禅を海外に広く知らしめた鈴木大拙、日本を代表する哲学者・西田幾多郎など様々な思想家を生み出した。

例えば、加賀藩は加賀宝生と呼ばれる能楽を保護するため、町方にも演技習得を奨励したことから、金沢では、植木職人が庭木を剪定しながら謡を口ずさむようになり、「空から謡が降ってくる」と形容されるほど、現在でも能が市民生活に息づいている。また、西田幾多郎の影響を受けた新渡戸稲造の「武士道」において、精神修養の実践として儀式以上の芸術と謳われている茶の湯文化も、市民の暮らしに根付き、茶器として発展した大樋焼や供される和菓子は、日々の生活の中で親しまれている。春夏秋冬それぞれの季節に決まって食される和菓子もあり、特に、色彩豊かで繊細な上生菓子は、高度な職人技術が生み出した芸術と言えよう。



茶の湯



金沢の和菓子(春に食される金花糖)



金沢の和菓子(上生菓子)

あらためて、歴史的展開の中で金沢における「文化的生産」を位置づけると、それは、ある意味で江戸時代に始まった工芸的生産の復活と再構築といえるものであろう。中世の職人的生産(クラフト・プロダクション)から産業革命による大量生産(マス・プロダクション)を経て再構築された現代の文化的生産(新しいクラフト・プロダクション)が、まさに、江戸時代以降培ってきた「工芸的生産システム」の発展の上に築かれてきたところに、創造都市としての金沢の特徴がある。

工芸や職人的なものづくりの精神は、学術文化の集積があってこそ、発展し、新たな付加価値を作り出すことができる。金沢には、およそ半世紀にも及び培われた学術文化を背景とする工芸やものづくりの精神があり、それらが、「用の美」という言葉に集約されるように、機能性と芸術性を併せ持ち、経済的価値と文化的価値のバランスが取れた財やサービスを作り出すことによって、文化的生産システムの展開を可能とし、その中心に位置づいていると言えるのである。